

宗教法人 日本福音ルーテル小岩教会 ルーテル保育園 始まりから現在まで

年	概要	園長	牧師	解説
1938年 (昭和13年)	ルーテル小岩教会の活動を始める		ウツミ 内海 季秋 スエアキ	2017年は宗教改革500年という年でしたが、この宗教改革を行ったマルチンルターの流れをくむ日本の教会が、ルーテル教会です。 ルーテル小岩教会は、内海季秋牧師の手によって、本所教会(当時は、菊川保育園とベタニヤ母子寮を併設)の分教会として設立されました。
1939年 (昭和14年)	ルーテル保育園の先駆けとなる託児所を開設			幼児教育を学んでいた内海牧師と美智夫人は、ご自分の子どもたちが連れてくる近所の友達を 住宅隣接の空き地で遊ばせることから始め、同年秋には、両親が働いている子どもを預ける託児所を開設しました。 子どもの使う椅子や机は、木のみかん箱に色紙を貼ったものでした。最初は費用は一切無料でしたが、保護者の方のたっての希望からごく少額の保育料をいただくことになりました。 戦争がはじまると、若い女性も軍需工場の働き手になることを強制させられました。 保育が不可欠になり、戦時託児所になりました。 教会関係の女子青年たちが入れ替わり立ち替わり子どもたちの面倒を見していました。 その一人である山本つる子さんは、1945年(昭和20年)の東京大空襲で、焼け野原となった本所の母子寮(墨田区)から、13人の母子たちを歩いて小岩の保育園まで引率し、小岩の地域では、近所の方々と一緒に看護をしたということです。 ルーテル保育園は、その成り立ちの最初から、託児と教育を分けることなく、一人ひとりを大切に保育することが、美智先生の教えの中に培われ、その思いが現在の理念ともなっています。
1945年 (昭和20年)	米軍の救援物資の配給所となる			戦前から地域に根差し、地域の人たちと支えあってきた教会と託児所は、戦後も救援物資の拠点となり活動を益々盛んにします。
1947年 (昭和22年)	牧師が交代する	オカモト 岡本 武夫 タケオ		内海牧師夫妻は、九州の大江教会に赴任となり、九州学園の再建という仕事をされることになります。 替わって着任されたのが、岡本武夫、しづ子夫人です。
1948年 (昭和23年)	児童福祉法制定とともに認可保育園となる	オカモト 岡本 武夫 タケオ		昭和22年12月に児童福祉法が制定され、翌年の7月、東京都公認37号として認可されました。この時代は、まだ貧しく、母親が家事以外の仕事をすることは、母親への負担が大きかった時代です。給食も薪で煮炊きし、母親が交代で作ったりして、大勢の子どもが通園しています。 どの子どもにも差別のない保育を通して、地域へ教会保育園としての理解が深まり、園児が増えています。
1950年 (昭和25年)	園舎の新築を行う			この頃、国鉄小岩駅の近くから現在の場所(旧千葉街道沿い)に移転し、園舎を新築しました。木造2階建ての園舎です。
1962年 (昭和37年)	教会棟とともに園舎も増築する			小岩の町も活気づき、通園する子どもも増えました。教会棟を新築する時に、保育室も増築していました。
1965年 (昭和40年)	牧師が交代する	エグチ 江口 瑞子 ミズコ	エグチ 江口 武憲 タケノリ	岡本牧師から江口武憲牧師に、その任が引き継がれ、園長は瑞子夫人が担うことになりました。 この頃は、戦後の貧しさから抜け、核家族化が進み、女性の仕事も充実していくことで、保育園の役割も変わり始めます。 長時間保育と保育内容の充実が望まれるようになり、瑞子園長の指導のもと、キリスト教保育、行事の在り方や、現在でいうカリキュラムの見直しが進められ、保育者の研修にも力を注がれます。 地域から、幼稚園のような保育園、との評判をいただきます。
1984年 (昭和59年)	牧師が交代する	トイ 土井菜穂子 ナホコ	トイ 土井 洋 ヒロシ	江口牧師から土井洋牧師に引き継がれ、園長は菜穂子夫人が担うことになりました。 この頃は、働く女性たちに意識の変化もあり、子育てが益々保育園にゆだねられます。 子どもを守りながら、その保護者を守る、子ども自身と保護者の気持ちを大事にする、というルーテル保育園の思いは脈々とつながっています。 菜穂子園長は、親子で体験する園行事を積極的に行うことで、子育てへの関心をひきだしたり、逆に保育園に通園するための用意を簡素化し、保護者の負担を軽減するなどの細かい工夫を進めていました。 親子の離れている時間が長くなればなるほど、親子の絆を深めることに細心の注意を払いました。
2005年 (平成17年)	牧師が交代する	マツダ 松田 繁雄 シゲオ	マツダ 松田 繁雄 シゲオ	土井牧師夫妻は、愛知県の高蔵寺教会へ赴任していき、替わって着任されたのが、松田繁雄牧師と道子夫人です。 社会福祉会計制度の移り変わりの過渡期にあるころでした。 前任の菜穂子園長が老朽化していく園舎のことが気になり、コソコソ残していたものを基に この頃から施設整備を目的とした積み立てを始めました。
2010年 (平成22年)	園舎の耐震診断、耐震工事を行う			マンションなどの耐震診断が盛んに行われるようになり、2007年頃から依頼していた耐震診断は、木造のための困難を乗り越え、2年越してやっと実行できることになりました。2009年度の末に出た結果は、中規模以上の地震が起きた時の倒壊する危険度が非常に高レベルということで、同年、年度を超えてすぐに大規模な耐震工事を行うことになりました。
2011年 (平成23年)	東日本大震災が起こる			耐震工事を半年前に終えた同年度末、東日本大震災が起きました。日本中を震撼させた日でしたが、工事のおかげでルーテル保育園の保育室では揺れもなく、避難させようと起こして回った午睡中の子どもたちが平和なあくびをしている様子に、保育者は思わず安堵させられました。 しかし園が面している千葉県に続く国道は、夜半過ぎまで帰宅困難者のラッシュが続き、ルーテル保育園でもお迎えが間に合わず、その晩は牧師館に泊まり、松田園長ご夫妻とともに過ごした園児もいました。 この地震の直後から、様々な部分に故障が起り始めました。老朽化の加速で、新築に向けた動きが始まります。
2015年 (平成27年)	新築工事のため、礼拝堂・園舎の解体が始まる			震災の影響で、耐震工事では補いきれない亀裂が老朽化した木造建築である園舎を襲いました。床下の水道管の破裂、剥がれ落ちてくる壁等の応急対処をしながら、急ぎ、新築計画を進めていました。そして、建築期間を1年間以上、2期工事とする保護者にも園児にも負担の少ない計画を立て、着工することになったのです。同じ敷地内にプレハブ園舎を建て、そこで子供たちは半年間を過ごし、半分出来上がったら新園舎に移る、という手間と時間とお金のかかる工事でしたが、借入金をしてでも子どもたちや保護者に迷惑をかけることはしませんでした。 東京都の都市計画道路補助事業で敷地を一部提供することになったり、江戸川区の都市防災不燃化促進事業での助けが始まり、独)福祉医療機構が宗教法人にも低金利で借入金を提供してくれることを始めたり、と、不思議なことに全てが追い風となっていき、松田園長はじめ、保育園運営委員も、大工事への着工に迷いはありませんでした。 何よりもあの震災が、この追い風を生んだのです。
2017年 (平成29年) ~	新園舎が完成し、定員を増やし、0歳児保育を始める 新礼拝堂も完成し、盛大に献堂式を執り行う			新園舎の完成とともに定員が80名から99名に変更。新たに0歳児クラスも設けることとなりました。 同時に新礼拝堂も完成し、5月にはお世話になった方々や他のルーテル教会の方々もお招きして盛大に献堂式を執り行い、皆で喜びを分かち合いました。
2020年 (令和2年) ~	牧師が交代する	ナイトウ 内藤 文子 フミコ		松田繁雄牧師は牧師としての定年を迎え、代わって内藤文子牧師が着任しました。松田牧師は園長として残ることになりました。 年明けから新型コロナウイルスによる感染症がパンデミックを引き起こし、礼拝も中止を余儀なくされるという未曾有の事態の中での牧師交代でした。